



そうご
寺内 蒼悟さん

●界小学校 6年

未来へとどけ ぼくの夢

将来の夢は、ゲームクリエイターになることです。

ぼくは、5才くらいの時から、ゲームをやるようになりました。ゲームをやっていくうちに、実際にゲームを作ってみたいと思うようになりました。

世界中の子どもたちに、楽しいゲームをたくさんやってもらい、笑顔を見たいと思っています。そのために、今から勉強を一生懸命がんばっています。世界中が笑顔であふれるようなすてきなゲームクリエイターになれるよう、努力していきたいと思います。



佐野ブランドキャラクター
さのまる

市長からの メッセージ



先月から今月にかけて各種団体等の総会・講演会などが数多く開催されています。多くの方々と接することができるよい機会であり、私も時間の許す限り出席させていただき、皆さんからの幅広いご意見を市政運営に取り入れていきたいと思っています。

さて、4期目の市政にあたり、これまで取り組んできました「観光立市」「スポーツ立市」に加え、新たに「産業・文化立市」をリーディング・プロジェクトとして位置付け、交流拠点都市に向けたまちづくりを進めていきたいと考えています。

内陸の港である佐野インランドポートが今秋、運用開始となります。さらには今後、出流原PA周辺の総合物流開発整備を推進しながら、本市の高速交通の利便性を最大限活用し、地元経済の活性化を図るとともに、千年の歴史を持つ天明鋳物や各種伝統・芸術文化、食文化、そして唐沢山城跡などの歴史文化を積極的に全国に発信し、新たな人の流れを創り出していきたいと考えています。

地方創生関連の報告ですが、旧田沼高校跡地の「佐野国際クリケット場」のクリケットパーク造成・整備事業が国の地方創生拠点整備の交付金事業に決定されました。先月も同会場で日本を含む4か国による国際大会が開催されましたが、この決定を機に「クリケットの聖地」に向け、国際規格を満たすグラウンドを整備し、インバウンドにつなげていきたいと思っています。

現在、第2次佐野市総合計画の策定に取り組んでおり、基本構想の素案がまとまりました。この後、地区懇談会の開催など皆さんのご意見を伺いたいと思いますのでよろしくお願ひします。

しばらく梅雨空が続きます。体調管理に十分気を付け、充実した毎日を送りましょう。

岡部正英



今回の表紙 今回の表紙 「くずうフェスタの花火」平成29年5月14日撮影

毎年5月に行われる「くずうフェスタ」。今年も葛生あくとプラザ北側で打ち上げ花火が行われました。雨の影響で1日延期となりましたが、多くの観客が集まり、夜空を彩る約1万発の花火に一足早い夏の訪れを感じているようでした。

えいこ
長島 栄子 さん
(栃本町)



キラリ★
話題の「ひと」

○プロフィール

第41回マスターズスキー選手権 八幡平APPI大会において、ジャイアントスラローム(大回転) 65歳代の部で優勝。

いづく
何歳になっても努力は実る

スキー競技の大回転は、約1千メートルの高低差があるコースに、30本弱の旗があり、その旗をスピードを緩めず攻めないと勝てない競技です。また、スピードだけではなく、旗を1本でも抜いて通過してしまうと失格になってしまいます。

娘さんと息子さんも競技スキーの県大会で何度も優勝経験があるというスキー一家で、栄子さん自身もゲレンデスキーは楽しんでいたものの、母親としてお子さんたちのサポートに徹していました。しかし大学生になった息子さんから「滑りをもっと楽しんだら」の一言がきっかけで、競技スキーを本格的に始めたそうです。

何年間かレーシングスクールでレッスンを受けてはいたものの大会に出る機会はなく、60歳の時に娘さんの競技ウェアを着用して出場したのが初参戦。61歳のとき、自分のウェアを購入して臨んだ栃木県マスターズ大会では、女性一人の参加で、ゴールした時点で優勝でした。しかし全国大会ではレベルの違いを痛感し「自分との勝負だ。来年はもう少し早くなろう。表彰台からの景色を見たい」と心に誓ったそうです。

今シーズンの大会は65歳から69歳までの競技者が競うグループとなり、「ゲ

ループの中で一番若いし、チャンスだ」と思ったものの、市民大会・県南4市対抗親善大会では転んで失格。焦りもあつたようですが、県連の練習会で気付いたものがあり、長かった階段の踊り場をやつと抜け、一段上がったと思えたそうです。

そして3月の八幡平で開催された全国マスターズ大会で、自分の最高の滑りができたと感じた1戦目で1位。2日目の2戦でも1位。見事表彰台の一番高い所からの景色を見ることができました。県連の人からいただいた「その年齢になつても伸びるんだね」との一言は、今までの努力が実つた瞬間でもあり、来シーズンもいい結果を残せるよう努力は惜しまないと誓った瞬間でもあつたようです。

毎週一人でレーシングスクールに通い、大会では何日も家を空けてしまうため家族には感謝の言葉しか見つからないと話す栄子さん。来シーズンのスキーが始まるまでは、ご主人とゴルフを楽しみたいとのことでした。

(市民記者 中里聖子)



マスターズスキー選手権での様子



「叱る」を強めることばは
コキノメス

年下の者が、あやまつたりよくないことをすると、年上の者がそれをいましめたり、とがめたりすることがあります。強い調子で教えさとしたり注意することを「叱る」といいます。叱り方はあやまち等の程度によっていろいろですが、方言にもいろいろな言い方があります。その主なものに、オドスとコキノメスがあります。共通語の「おどす」は、相手を恐れさせたり、おびやかしたりすることで、恐怖心をうえつけておびけづかせることをいいます。それに対して、方言のオドスは、単純に叱つたり注意することをいいます。

「叱られる」という受身の方言には、「オドサレル」よりも、オドサレルが変化した「オツツアレル」が多く使われます。

「あの子はいたずらつ子なんで、オドしてやったら、オツツアレタことが気になったンダンベか。このころは、さつぱり姿がメーナー(見えない)ね」

「叱る」を強調したものに、コキノメスがあります。「コキ」は、たたくとか殴るといふ意、ノメスは、たたいて前へ倒すとか転ばす、あるいはひっくりかえすといった意味です。このようにコキノメスは、「叱る」とか「注意する」意をよりいっそう強めます。コキノメスは、普通「やる」と結びついて、「コキノメシテやる」という言い方をします。

「トーシ(いつも)注意してるんだけど、いうことをキクツチャーネー(きこうとしない)子だから、コンダ(今度は) コキノメシテヤンベとモツテさあ」

(市民記者 森下喜一)

